

現代の文学 = 10

石坂洋次郎集



河のほとりで
あいつと私
寒い朝

河出書房新社

現代の文学 10 石坂洋次郎集

© 1963

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上 靖
松本清張 三島由紀夫

昭和38年 8月10日 初版印刷

昭和38年 8月15日 初版発行

定価 390円

著 者 石坂洋次郎
発行者 河出孝雄
印刷者 高橋武夫
装 幀 原弘(N. D. C)

印刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同納入・東邦紙業株式会社
クロス・日本クロス工業株式会社
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京(291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・岸田製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

河のほとりで……………三

あいつと私……………五九

寒い朝……………五七

年譜……………平松幹夫・六三
 解説……………奥野信太郎・六九

挿画 中村琢二
 写真 浜谷 浩

石坂洋次郎集

河のほとりで

秘 密

「ただいま——」

学校からさがって来たたね子は、勝手口から食堂に通って、へたばるような恰好で、テーブルに坐った。目の前には、今日のおやつのだら焼きか、ガラスの蓋つきの容器に入れてのせられてあった。厚ぼったい皮が、きつね色にほどよくこげていて、見るだけでも唾がわいて出そうだった。

「おかえんなさい」

客間の方から下って来た女中のたみ子が、すくに熱いお茶をいれてくれた。

「お客さんは誰なの？」

「沢田の小父さまでございます」

「そう。またママに叱られているんでしょう」

そう云ったきり、たね子は夢中でだら焼きをほおばった。それは、食べ次第、甘い糖分に消化されて、身体の中にめぐって行くのが分るような満足感をもたらした。とつぜんだが、人生っていいなあという気持になってしまふほどだった。

たね子は二十一歳になる。多賀谷新蔵ととも子の中の長女に生まれ、現在は城東大学の文学部の二年生に在学中だ。おしろい気のない、陽やけた顔で、鼻の下にうつすらとうぶ毛がはえていたり、ニキビが二つ三つ吹き出ていたり、どこか荒けずりな感じがする。白い歯が、上下カチッと揃っているのが、いまのところ、顔の中で一ばん印象的だ。

背丈も、女としてはよく伸びてる方で、肩がひろく厚く、冬でも白いソックスだけでむき出しにしている二本の脛は、円柱のように彼女の身体を危な気なくささえている。

学校では、背の低い男の学生達が、大型の女子学生のことを、嫉み半分に「ミス・ジャイアンツ」と呼んでいるが、たね子もジャイアンツ組の一人である。

母親のとも子は、

「お前は身体が伸びたわりにお色気が足りないねえ」と批評するが、たね子自身は、さうは思っていない。鼻の下にうすぐろい生毛をはやしていても、ニキビをほ

つたらかしておいても、自分には、異性にアピールするものが、根ぶかく潜在している筈だと信じているのだ。

澄んだ丸い大きな目。強い線の鼻柱。形よく反った厚目な唇。やはり厚目なさくら色の耳たぶ。——一たん自分の胸に情熱が燃え出したら、そういう造作をもった顔は、凄じいほどの性の魅力を滲み出させる筈なのだ。

母親の云うように、男性に愛玩される、ちんまりしたお色気がないことは確かだが、その代り、相手を骨ぬきにするかも知れない、本質的な女性の吸引力のようなものに恵まれていることには、ひそかな自信を抱いていたのである。そう思うのは、たかぶった、淫^淫りがましいことなのだろうか。

そうは思わない。女が女であることの自信をもっているだけのことでないのか……。

たね子は、苦いお茶をふくんで、口の中の甘さを消してしまおうと、沢田藤五に会うために、室を二つへだてた客間の方へ歩いていった。と、母親と藤五が、興奮した口調で云い合っているのが聞えたので、思わず、座敷の入口の所で立ちすくんでしまった。

「……いやあ、ママさん。たびたび無心に来る儂^わがわるいことは分ってるんだが、なにも、貴女のように、そうビシビシと年寄をやつつけんでもよかろう。もつとも、

貴女は、若いころから無性に気が強い人ではあったがね。よその旦那さんをとってしまいうぐらいの人だから……」

「なんですって。それで私を脅迫しているつもりで、みんな分別のそなわった大人同士でやったことだし、とるだのとられるだのって、そんな自主性のない云い方ナンセンスだわ。それがおどしになると思ったら、大まちがいよ。ともかく、今日は、びた一文だつて差し上げませんからね。帰ってちょうだい、小父さん……」

それだけのやりとりを耳にしたたね子は、あとのこととは、ほとんど本能的に行動した。まず、足音を忍ばせて、二階の自分の室に駆け上り、洋服簞笥の引き出しから大きな皮の紙幣入れをとり出し、女中のたみ子には、近くの文房具店でノートを買うのを忘れて来たからと断わって、勝手口から外に飛び出した。

そして、後をふり向きふり向き、歩いたり走ったりして、噴水がある駅前の広場に出た。ここで沢田藤五の帰りを待ち伏せるつもりなのだ。

たね子は、人目につかないよう、新鮮な緑の葉が茂った、大きな桜の木の下へのベンチに腰を下した。胸が破けそうにときめいていた。痛いほどだった。

(よその旦那さまをとってしまいうぐらいの人だから……)

母について、生れてはじめてそんな話をきいたたね子は、母が、妻であり母親でもある現在の立場で、どこかの家庭の御主人と恋愛に陥ったという意味に解釈した。母自身も、

（みんな分別のそなわった大人同士でやったことだし、とるだの、とられるだのって、そんな自主性のない云い方……）

うんぬんと、云われた事実を肯定したような受け答えをしていたではないか……。

いつ、どここの男性と、そういう行為があったのであろう。たね子の頭の中には、思い出せるかぎりのわが家の過去が、映画のフラッシュバックのように閃いてすぎた。だが、どこにも、それらしい陰影を帯びた場面は見出されなかった。父はやさしく、母は口うるさく、きびしく（たね子はそのとり合せがたいへん好ましいと思っていた）、いつもきちんとした家庭の生活が営まれていた筈である。

父と母の間に口争いがなかったとは云わない。しかし、その口争いは、かえって夫婦の仲の好さを物語っているようなものだ。自分が将来結婚した場合のことを考えても、何かでむしゃくしゃした気分の時、八つ当たりが出来ないような窮屈な夫だったら、ずいぶんつまらないことだろうと思う。

とすると、母自身も肯定している行為の本体は、いったい何なのであろう。のんだくれの沢田の小父は、母について、どういう秘密をにぎっているのであろう……。

たね子は、ときどきベンチから立ち上って、銀杏並木の道路の奥の方をのぞいた。二人のあの時の口吻では、いまずぐにも、沢田藤五が、母から追ひ出されそうに思われたのに、その藤五はなかなか姿を現わさなかった。別な道を通って、別な駅から電車に乗るつもりなのだろうか……。

たね子は、駅の建物に出入りする人々をボンヤリ眺めていた。男、女、老人、子供……。ふだんは何気なく見すごしているそういう人々が、いまは、それぞれに異った運命と環境をになっている。彫りの深い、孤独な影像に見えるのであった。

（よその旦那さんをとってしまいうぐらいの人……）

藤五のそういう言葉が、母を、母としてでなく一個の女として浮き出させたように、行きずりの人々も、哀しい、個性的な存在に見え出したのである……。

あきらめて、帰ろうとしかけると、並木道の向うの方に、藤五小父の姿が見え出した。それもだいたい変った現われかただった。子供の遊びに、じゃんけんで勝った者が、きまりの歩数だけ前にすすみ、早く目的地に到達した者が勝ち——というのがあるが、藤五小父は、途中

で道づれになったららしい二人の女の子と、そのちゃんけんをうちながら、駅の方に歩いて来ているのだった。

そして、ここでも藤五小父は敗者の立場にあり、もうちゃんけんが見えなくなるぐらいに、二人の女の子達に、遠く引き離されていた。

「可哀そうだから、もうあの小父さんをおかんべんしてあげなさい。私の知り合いの人なの。……貴女がた電車にのるんぶしょう。早くいった方がいいわ……」

たね子は二人の女の子にそう呼びかけた。

「変な小父さん。……私達が二人でじゃんけんをやっていると、小父さんも仲間に入れてくれって、途中から入ったの。でも、とても下手っぽいんで、可笑しくなっちゃった……」

「小父さん。バイバイ……」

二人の少女は、藤五小父の方に手をあげてふって、駅の構内に駈け出していった。

藤五小父も、やっとたね子の姿を認め、急にとりすました物腰で、こちらに近づいて来た。もう六十を越えてる筈だったが、背が高く、肩も厚く、見かけはしっかりしていた。あかく酒やけのした顔は、白い豊かな髪に包まれ、いまでも若いころの美男の面影をとどめていた。

が、つき合いのある人間にはすぐ分るのだが、大きな目が青味を帯びており、それが奇妙に光って、崩れた弱い

性格をあらわに示していた。

服装に凝って、いつも藤五のステッキをついて歩いたりしているが、たね子達がみると、そのためにかえって、社会の疎外者であるという印象を強めているように思われた。今日の藤五小父は、黒のベレ帽、グレーのボロシャツに茶色の格子縞の上衣、それにフラノのズボンというとり合せの服装で、ピカピカ光る赤皮の靴を穿いていた。外国生活をしたこともあるせいで、着こなしは出来ていたが、それだけに、どこもかしこもざわついている、せわしい日本の街頭では、かえって浮き上ったものに見えるのであった。

「やあ、大学生のお嬢さん——

藤五は、テレ臭そうに、自分から声をかけて、たね子に近寄って来た。

「今日は、小父さん。……ママの所に行つてらしたんですか？」と、たね子は呆けた調子で尋ねた。

「ああ、そうだよ。このごろしばらく御無沙汰していたからな……」

「ママは相変らずがっちりしているでしょう？」

「そりゃあママさんは、いつだってがっちりしているさ。

……家庭の主婦というものは、それでなければやっていけないものだ。貴女だっておいおいはそうなる……」

「あら、理解があるのね。……でも、ママのは、ときど

き度がすぎてケチンボになることがあるでしょう」

「そういう言葉で、自分の母親を評価することには賛成
出来んね」

「ママは今日、小父さんに投資しなかったでしょう？」

「どうしてそんな事がわかる？」

「小父さんが哀しそうな表情をしていらっしやるから

……」

「ハッハッハッ……。私にまだ哀しい表情なんてあった
のかな」

「ママに投資をことわられたんでしよう？」

「そりゃあ私のはあてにならない物件だからな。断わる
のが当り前かも知れない……」

「じゃあ、私が小父さんに投資してもいいわ。お金、少
ししきゃあないんだけど……」

たね子は、家を出る時にもって来た、黒皮の大型の紙
幣入れを持ち上げてみせた。

藤五は、酒やけのした顔に、卑屈な表情をチラとかけ
らせて、

「貴女は子供じゃからな。……子供とはお取引が出来
ん」

「大人の扱いをしてくれれば大人だわ。……そこでお茶
でも飲みながらお話ししようよ、小父さん」

「いやあ、貴女との取引きは遠慮しよう。この上、ママ

さんに噛みつかれたくないからな……」

藤五は珍らしくためらった。たね子は微笑して、一人
でうたずいて、

「じゃあね、小父さん。じゃんけんで決めましょう。私
が勝ったら、私と取引きをしてもらう。小父さんが勝つ
たら、小父さんの好きなようにする。いいでしょう。さ
つき、あの女の子達とじゃんけんをしていてたでしょう。
私としないっていうわけがないわね……」

藤五は苦笑して、

「えらいところを貴女に見られちゃったな。仕方がな
い、やろう。私はけんが弱くて、あんな子供達にも負け
ただけど……」

「はい。じゃん・けん・ばい！」

藤五がはさみで、たね子が石で、たね子が勝った。た
ね子は、子供のころからのつき合いで、藤五が無邪気に
している時は、けんをうつと、一ばんはじめには、必ず
といていいぐらいにはさみを出すことを、ちゃんと吞
みこんでいたのである。

「さあ、小父さま。いらっしやい」

たね子は、広場に面して並んだ右側の七、八軒の店の
中の、酒場もかねた小さな喫茶店に入った。そして、奥
まった室の窓際の席に、藤五と向き合って坐った。

自分のためには紅茶とケーキ、藤五小父のためにはオ

ン・ザ・ロックを註文した。

氷の浮いたウイスキーのコップが運ばれると、藤五はかすかに慄える手でそれを取り上げ、二口三口で飲み干した。

「もう一ぱいいただくぜ。……娘みたいな貴女におごらせてわるいな。……ボーイさん、今度は水割りで頼むよ」

コップで二はいウイスキーを飲み干すと、藤五の顔にはいきいきとした色が浮んで来た。口のまわりも滑かになった。

「ところで、たねちゃんは何処かへお出かけかな。教科書はなし、学校の帰りとも思えないが……」

「そうなの。……それよりも、小父さんは、今日ママにどんな物件をもちこんだの」

「いやあ。ハハハ……。子供の貴女に話すことじゃあな……」

「子供供って云わないでよ。私の身体、それこそ子供だって生めるのよ。ママの代りに、私が小父さんの物件に投資してもいいって云ってるでしょう……」

たね子は、黒皮の紙幣入れからありったけの千円紙幣をとり出して数えた。八枚あった。

「これ、私、半年ばかりの間に貯めた全財産よ。そりゃあ銀行預金はべつにあるけど……。小父さん、これ、も

っていいいわ。そして、小父さんがうんともうけた時に返して下さればいいのよ……」

紙幣を見ると、藤五の顔には、迷ったような色が浮んだ。しかし、一応、大きな掌で紙幣を押し返すようにして、

「いや、貴女とはほんとに取引きが出来ん。……ま、しかし、参考までに、ママさんに弾ねられた物件をみせようかな。これだ……」

藤五は上衣のポケットから、皮張りの指輪のケースをとり出した。蓋をあげると、白っぽい台石に緑色がかった丸い宝石のようなものがはまっていた。

「なんですの、これ？」

「メキシコ・オパールの原石だ。これぐらいの大きさのものになると、磨いて艶を出すと、銀座あたりの貴金属商の店では、軽く二、三十万円はするな。……私はそれを日ごろお世話になっていることだし、ママさんに三万円でおゆすりしようと思つたんだが、ママさんはてんで私を信用してくれないんだ。いったいこの……」

藤五はそれから宝石論を一席ぶち出した。洋の東西にわたる広汎な宝石の知識を滑かにしゃべりまくっている藤五は、いかにも仕合せそうだった。少くも、それをしゃべっている間は、目の前にあるメキシコ・オパールの原石というのが、いんちきなまがい物であることを、

意識しないですませられるからであらう……。

「いいわよ、小父さん。このオパールは小父さんがもっているもうけて下さい。私はそれに八千円だけかけるんだから、お金をとってよ。小父さんは信託会社みたいなものよ……」

「そうかねえ。無理にというんだから、このお金は、じゃあ私があずかっておこう。二ヶ月もしたら、二倍あるいは三倍にして貴女に払いもどすからな。……もちろん、ママさんには内密だろうな」

「それでないと私も困るわ」

藤五は、紙幣束を上衣の内ポケットにおさめたが、柔かく微笑している顔の頬のあたりに、硬ばった、くらあゝい感じのしわが、二筋三筋浮んだ。——たね子は思わず目をもむけた。

沢田藤五の先祖は、明治維新まで、奥羽地方のある小藩の大名であった。父親の秀信の代までは華族の家柄であったが、藤五はそういう名門の長男に生まれ、妹が二人あった。

子供のころから、藤五は、色の白い、顔立の整った美少年だったが、多勢の奉公人にかしずかれて、わがまま二ばいに育ったせいか、気紛れで、耐久力に乏しく、小さな才能のひき出しはたくさんもっているのだが、なにか一つ大成させることが出来なかった。

大学も中退し、その後ヨーロッパに留学したが、放蕩やおしやれを覚えただけで、得る所がなく内地に帰って来た。それからは、貿易会社、不動産業、金融会社、料理店、旅館、バス会社等、さまざまな事業に手を出したが、どれも失敗して、その間に父祖伝来の財産をすっかりなくしてしまい、終戦後は、むかしの知り合いの所に、「国宝級」だの「文化財」だの「世界的」だのと称する、怪しげな美術骨董品をもちまわって、お金をせびって歩くようになった。

それも、はじめは、何十万円だの何百万円だのと大きな金額を吹っかけていたものだが、このごろではだいぶ落ちぶれて、五、六万円とか二、三万円、ときには万に足りない少額のお金を無心してまわるようになった。

若いころ、一度、家柄が欲しい地方の金持の娘と結婚したことがあるが、藤五の破産者のな性格がたたって長続きがせず、細君は一人生れた男の子をつれて実家に帰ってしまった。(その男の子は、いま中年の働きざかりで、社会主義者になっているとかいう話だった……)

容姿がすぐれていて、ともかくも性格にあくどきがない藤五は、細君に去られた後も、身のまわりの世話をしてくれる女にはことを欠かず、現在は、新宿辺のバーのママと同棲して、大切にされているという。

藤五とたね子の家の関係を洗うと、たね子の曾祖父に

当る人まで、多賀谷の家は、代々、沢田家の家老を勤めていたのである。百年も前の主従関係が、今日までその影響をもち続けているのは、たね子の父の多賀谷新蔵が、物にこだわらない抱擁力をもった人間であること（新蔵は小規模だが手堅い貿易会社を営んでいる）、また藤五自身が、頼りにはならないが、さりとて憎むことも出来ない人柄であること等が理由にあげられるだろう。

口はペラペラとうそ八百を並べたてているが、青い目の光や頬の動きが（私がいましゃべっているのはあらかたうそっぱちですよ、だまされちゃいけませんよ）と託びてみせているような人間を、だれも本気で憎むことが出来ないのである……。

たね子は、子供のころから、藤五小父を好きだった。

藤五小父となら、世間の大人を相手にしてる時とちがい、同じ水準の人間と物を云ってるような気やすさが感じられたからであった。たね子が大学生になったいまは、そこを通りこして、自分の方が年長者であるかのような余裕をもつようになっていた……。

「ね、小父さん。ほんとを云うと、私が小父さんに投資するのには、一つの条件があるんだけど……」

たね子は、改まらないよう、機会をみてスツと云った。藤五は弱々しく微笑して、

「そうだろうと思った。ママの娘の貴女が、ただお人好

しだということは考えられないことだからな。はい、その条件を聞きましよう……」

「じゃあ云うわね。でも、その前に、小父さんに一つ考えてもらいたいことがあるの。私の立場をはつきり理解してもらうために……」

「いろいろ御念のいったことだな。はい、考えましよう……」

「それはね、歴史と私共の関係についてですわ」

「歴史と私共——？」

もっと身近かなことが持ち出されるだろうと思っていながら藤五は、あつげにとられたようにたね子の顔を眺めた。

「ええ、そうよ。歴史と私共の生活には、どんな因果関係があるかっていうことを教えてもらいたい……」

「そりゃあ、貴女。私等は『溫故知新』……ふるきをたずねて新しきを知る、という風に教えられたな。早い話が、私の先祖は大名華族の一人で、勞せずしてかなりな財産を所有し、ぜいたく三昧な生活を送っていた。そういう家柄に生れて、わがままいっぱいに育てられた私は、四民平等の社会の激烈な生存競争に耐えられず、ご覧のいたらくの境遇に没落してしまった。わが家の歴史が、私のような子孫の一人を生んだっていうわけだ……」

なあ、たね子さん。私はわるい時代に生れ合せたものだと思つてゐる。なぜなら、戦後築き上げられた日本の社会では、金持の子ほど、若いうちから、自分を鍛え上げるいろんな生活のチャンスに恵まれて、逞ましい生活力の人間に育つていく傾向がみられる。アメリカでもヨーロッパでも、近代の社会では、どこもそうだ。

ところが、私が育つたころの日本の社会の制度は、華族や大地主というのは、国家の特別な保護を受けていた時代なので、そういう家柄に生れた子供達は、生きるための苦勞も知らず、ファイトのない、うす馬鹿みたいな人間になつちまう例が少くなかつた。

私の仲間の一人にも、髭を生やした大人のくせに、ネクタイをしめる、ズボンに足を通す、それにベルトをしめる、靴下を穿く——小学生でも出来るそういうことを、いちいち召使いの手を借りなければ出来ない男があつた。そのくせ、そいつはテニスやゴルフのベテランなんだ……」

藤五のくせで、一つの主題にひつかかると、なんでその問題がとり上げられたかというもとを忘れて、あちこちと話をとばしてしゃべりまくるのだ。ボンヤリ聞いていれば、面白くないこともないのだが、目的があるたね子は、強いハッキリした調子で、

「分つたわ、小父さん。つまり、現在の私共は、歴史と

環境の産物なんだから、めいめいの歴史についてよく知つておいた方がいい——ということになるわね」

「そうだ、そういうことにもなる」

「父や母の存在は、私共にとって、もつとも身近い歴史の一部分だわね」

「そうだ、親をみれば子供が分ると云われるぐらいだから……」

「殊に影響力の大きい母親の存在については、子供として十分に知つておく必要があるわね」

「そうだ……そりゃあ……」

しだいに網がたぐり寄せられるような氣配が感じられるのか、藤五は無意識に、警戒するような表情を示した。

「ねえ、小父さん。……いつだったか、私、どこかの親戚の家で耳にはさんだことなんだけど、ママが、奥さんのある男の人と恋愛をして、その旦那さんをとつてしまったことがあるって、ほんとのことですか。……そんな事がほんとにあったとしても、ママを好きな私の氣持には変りがないんだけど……」

たね子は、何気ない調子で云つたつもりだったが、その声がこわばつてゐることが、自分でも分つた。

藤五は、怒つたように、白い目で、ジロリとたね子を見らんだ。そして、返事をする前に、ボーイを呼んで三

ばい目のウイスキーを注文した。それがくる間、組んだ両手の指先きを、せわしくこすり合せながら、戸外を眺めていた。というよりは、たね子の存在を無視したポーズをみせていたのである。

ウイスキーが来ると、藤五は、立てつづけにそれをおつて、

「たねちゃん。貴女はさっき家にいて、ママと私の話を聞いていたんだね」

そういう頭のはたらきになると、藤五は決して鈍くはないのだ。

「——ほんとにそうなの、小父さん。べつに立ち聞きするつもりはなかったんだけど、客間に行こうとしたら、中から小父さんの声が聞えて来たのよ」

「そんなら、こんな廻り道をするのがなく、私の顔をみたら、すぐそう云えばよかったんだ……」

「ママのスキヤンダルみたいなこと、すぐに私がきけると思って……?」

そう云うと、たね子の目には、思いがけなく涙があふれて来た。

藤五は、面くらったような表情で、胸のポケットからハンカチをぬいて、たね子にさしのべ、

「そうだ、たねちゃんはまだ若いんだったな。……これで顔をふきなさい」

たね子は、そのハンカチでせわしげに涙をふき、ついでにクスンと涙を^{はな}かんだ。すると、藤五はあわて気味に、

「あらあら、そのハンカチはイギリスの特別製のもので、日本に十枚とはない代物なんだ……」

「小父さんのケチンボ。私、小父さんに八千円ほど投資したじゃありませんか」と、たね子は食ってかかった。

「いや、金銭の問題じゃないんだ。……洗濯して返してもらえばいい……」

「ママのことを話してよ、小父さん。いつ、どこでママにそんなことがあったの?」

「むかしあったんだ。……そして、それがなかったら、貴女はこの世に生れていなかったんだ」

「それ、どんな意味なのよ。さっぱり分らないわ。……相手の男の人って、いったい誰なのよ」

「相手の男の人は、貴女のパパだよ」

「——そんなら、スキヤンダルでもなんでもないじゃないの。パパとママなら……」

「貴女のように利口な人でも、肉親のこととなると、盲点が出来ちまうんだな。私は、十分な説明をしている筈なのに……」

「——分らないわ」

たね子は頼りなさそうに呟いた。頭の中では、火花を